「父と娘」のドラマトルギー*

——援助交際の社会学③——

圓 田 浩 二**

1. 問題の所在

「援助交際」という言葉が中年男性と女子高校生との間の売買春を指し示す言葉として使用され始めたのは、1993年頃である。もともとはテレホンクラブやデートクラブ¹⁾において、女性が男性に金品を援助して欲しいと話したことから始まったとされ、その後男性が女性に金品を提供し女性が性的なサービスを提供する行為を指す言葉として使用された。この援助交際を犯罪事件としてマス・メディアが取り上げることで表面化し、事件が頻繁に起こるようになって社会的に一般化した。援助交際が記事として最初に全国紙新聞紙面に登場したのは、1994年9月20日付の朝日新聞である。それ以降、「援助交際」という言葉はマス・メディアにしばしば登場するようになった。

1996年から1997年にかけてマス・メディアは「女子高生の売春」と同義に援助交際を頻繁に取り上げている²⁾。同時に援助交際は、マス・メディアの報道を通じて、人々に深刻な社会問題として認知されるようになった。社会問題としての援助交際は、売春防止法・児童福祉法といった法律違

反の問題だけでなく、教育問題や家族問題としても認識された。と同時に、援助交際の社会問題化³⁾が「売春はいけない」とする社会的前提がもっていた無根拠性を暴くことによって、モラル・パニックを引き起こし、援助交際は現代日本社会の抱える諸問題の象徴として注目を集めてきた⁴⁾。また援助交際という行為が中年男性と女子高校生との間の売買春の行為だけを指し示すのでない。援助交際という名目で女子高校生だけでなく、さまざまな社会的地位の女性、男性が関わって行われているのも事実である [圓田 1998]。それだけに、援助交際は中年男性と女子高校生との間だけの問題にとどまらず、より多くの問題を抱えている。

本稿の主眼は援助交際を行う男性に置かれている。援助交際を行う男性に主眼を置くことで、男性たちが援助交際に何を求めているのかについて論じたい。援助交際といえどかく取り上げられがちな女性たちではなく、女性側から得られた情報をもとに、彼女らを買う側にいる男性たちの分析を行う。その理由は前回の論文 [圓田 1999] において援助交際女性について分析を行ったために、次に男性を取り上げるという側面も大きい

*キーワード：ドラマトルギー・幻想・カウンセリング

**またこうじ・関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

- 1) テレホンクラブはテレクラの略称して使用される。男性客が料金を払って個室に入り、一般女性からかかってくる電話を待つシステムを指す。会話の内容は自由である。1985年に東京で誕生した。またデートクラブとは、業者が女性たちに居場所を無料で提供し、男性客は入店料を払い、好みの女性にデート料を支払って外に連れ出すことができるというシステムである。デートの中身は交渉次第である。
- 2) 日経テレコンを用いた新聞記事の、「援助交際」というキーワードによる検索では、98年5月末までに、日経四紙（日本経済新聞、日経流通新聞、日経ビジネス、日経産業新聞）、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、産経新聞の五紙では、ちょうど1000件の記事が存在した。年度別に見ると、96、97の両年に全体の約八割の記事が集中している。
- 3) 朝日新聞社が1997年の12月14、15日の両日に行った三千人規模の面接調査では、女子中高生の援助交際を大きな社会問題として認識したのは、全体の85%に至っている [朝日総研レポート no.130 1998. 2 朝日新聞総合研究センター pp.117-142]。
- 4) 援助交際が社会に対して与えたさまざまな影響については、村尾 [1999] が参考となる

が、それにもまして取材活動を通して、間接的に耳にする男性たちについて論じる必要を感じたためである。彼女たちを買う男性たちに特徴的なのは、男性たちがただ女性との性的な行為を目的としているだけでなく、彼女たちとのコミュニケーションを目的としていることである。彼らは自らである役割を担い、彼女たちにある役割を演じることを要求している。このことは、前々回の論文[圓田 1998]に記述したサクライの事例においても言及したことである。

論文の構成は、まず筆者の援助交際を行った女性たちから得た情報をもとに、彼女たちが出会った男性像を再構成する。次に援助交際に登場する男性たちのコミュニケーションのパターンを、男性たちが抱いている幻想をもとに、演技論的な側面から「性欲充足型」、「疑似恋愛型」、「疑似家族型」という三つのタイプに分化させる。そしてこの三つのタイプを、筆者の援助交際を対象としたフィールドワークから得られたインタビュー事例⁵⁾によって裏付けながら、彼らのコミュニケーションを分析する。特に、援助交際女性との擬似的な親子関係を演じる男性たちの事例を詳しく取り上げ、検討を加える。最後に、このような演技論的なコミュニケーションが男性たちに何をもちがらしているのかについて論じている。

2. 援助交際男性

本稿では、援助交際において、女性に対して金品を代償に性的な諸行為を行おうとする男性を援助交際男性と呼ぶ。援助交際において男性は通常女性を買う側に立っている。ただ例外的に、「逆援助交際」と呼ばれる現象では、女性側が男性を買う、あるいは男性が自らの性的なサービスを女性に売るといったケースも報告されている

[『AERA』1999.1.11 pp.58-60 朝日新聞社]。

この節ではインタビューをもとに、援助交際男性像を明らかにする。彼らは女性に金品を提供することで、何らかの性的なサービスを受ける立場にある。年齢については、下は19歳の青年から上は80歳を超えている老人までと、実に幅広い。しかし大部分を占めるのが三十代、四十代の男性たちである。この理由は、1. 性的関係の対象として若い女性を望むという性的指向と、2. 現実にはこのような性的関係は金品を媒介にせずには成立しにくいという状況と、3. それを実現するために必要とされる金品を賄うことのできる経済力をもつためであると考えられる。

また援助交際女性の話によると、この三十代、四十代の男性たちは、援助交際を行う彼女たちにとっても援助交際の相手として望ましいと考えられている。その理由はごくたまに年上の男性の方が包容力や理解力があるために望ましいという女性を除けば、男性たちがこの年齢になれば社会的な地位と家族をもつケースが多いために、相手はレイプや恐喝といった危険な行為をしないだろうという予期を抱いているためである。

援助交際男性の職業に関しては、前回の論文でも記述したように、筆者の取材を通して援助交際女性から直接聞いた話であれば、医師、弁護士、大学教員、会社経営者といった社会的地位の高い人から、警察官、ヤクザ、高校教師、サラリーマン、自営業者、大学生まで実にさまざまである。これらの職業の中でも多いのが、順にサラリーマン、自営業者、会社経営者である。

「援助交際とは、ある人が金品を代償に、他者の性的な部分を自主的に売買することを前提として成立するコミュニケーションである」[圓田 1998 p.120] と定義したように、援助交際男性

5) 援助交際の調査は1997年の5月から現在も継続して行われている。今回の論文では、1999年の5月31日までに収集した調査データ61件を用いる。このうち面接インタビューは42件であり、残りの19件は電話インタビューである。

なおここで使用するデータは、①援助交際をしたと自認し、さらに②インタビュー内容をテープに録音することを了承した女性であること、③その録音したテープの会話内容をすべてノートに記録したという、この三つの操作を満したものであることを明記しておきたい。

また取材相手の名前は本人が希望した名前を仮名として採用している。インタビュー内の()は、筆者の補足である。またインタビュー事例の後に付いてある()には、取材相手の当時の年齢、社会的身分、取材日、取材場所が記載されている。

調査方法と具体的手続き、データそのものの特性については、圓田 [1998] を参照のこと。

は、女性に金品を提供することで、女性との性的なコミュニケーションやサービスを得ている。一般に社会的に望ましいとされている、両性の愛情をもって形成される性的な関係を、金品によって得ていることから推測すると、彼らは日常生活では女性との性的な関係を自らの能力によって形成することが困難な男性、俗に言う「もてない男」であると考えられる。実際に、援助交際女性たちにインタビューを行ってみると、次のような発言が得られる。

<データ1>

筆者：援助交際をする男の人は、もてる人もてない人、どっちが多い？

ヒロコ：もてん人。若い人が特に。前（に）22歳の人としたけど、なんかそんなに（カッコよくなかった）。みんな身長が低い人が多い。160とかね165（cm）とかね。

（19歳 フリーター 1998.12.30 福岡博多）

取材時までには70人ぐらいの男性と援助交際をやってきたというヒロコは、若い人の場合、特にもてない人が多いと語る。ヒロコの話に見られるように、援助交際男性には、身長が低いなど身体的魅力（physical attractiveness）に劣る男性が多いと考えられる。このように、女性にもてないために援助交際を行う男性を、ここでは性的弱者と呼ぶ。

次に、援助交際男性にはどんな感じの人が多いのかを尋ねたインタビューを見てみよう。

<データ2>

筆者：援助交際している男の人って、どんな感じの男の人が多く、共通項とかある？

サクライ：共通項はね、三つに分かれますね。本当にね、普通の人、どこにでもいそうなおじさんとか、どっちかというのんびりマイペース型の人と、パツと見、強面でヤクザ系の人と、あと本当に遊び人風って

う感じですね。あんまり暗いタイプはいなかったですね。なれている人が多かった。

（23歳 OL 1998.3.20 東京小岩）

サクライの発言からは次のことが理解できる。援助交際男性とはその雰囲気から、「普通の人」「ヤクザ系の人」「遊び人」という三つに分かれる。援助交際という「いかがわしい」イメージからは、「ヤクザ系の人」や「遊び人」の人たちを連想させるが、この人たちはむしろ少数派である。サクライの発言にも現れているように、援助交際の特長な点は、職場では真面目で、家庭ではありふれた父親や夫を演じているだろう普通の男性と、外見的にも内面的にも普通の範疇に入るような、どこにでもいそうなOLや既婚女性、女子学生とが、お互い一面識もないにも関わらず、会って金品を媒介して性的な行為を行うことにある。

筆者はこれまで60人以上の援助交際女性にインタビューを行ってきたが、援助交際女性には援助交際男性には「普通の人」が多いと答えるケースがほとんどであった。ここで言う「普通」とは外見的にも性格的にも性的志向においてもアブノーマルではないという意味である。確かにSM⁶⁾趣味をもったサド男性やマゾ男性の話もしばしば聞くが、この趣味をもった男性と出会ったり、援助交際をしたことがあったと話してくれた援助交際女性は三人に一人ぐらいである。

整理してみると、援助交際男性は女性との性的関係をどう位置づけるかによって、二つのパターンに分けることができる。まず一つ目は援助交際男性が素人女性との性的関係を積極的に楽しむために援助交際を行うという遊び人系の男性と、もう一つは性的関係を形成することが困難なゆえに援助交際という手段で性的な関係を得るという性的弱者である。まずこの二つに分けることができる。さらに性的弱者には、身体的魅力が劣っているという理由で性的弱者に位置づけられている身体的弱者と、女性との会話が苦手、あるいは上手に意志疎通ができないために女性との性的関係の

6) SMとは通常男女間で行われる性的行為の一つで、嗜虐を好むサディストと被虐を好むマゾヒストという役割関係によって形成される。サディストが男性、マゾヒストが女性という組み合わせと、サディストが女性、マゾヒストが男性という組み合わせがあり得る。基本的には、サディストがマゾヒストを辱め虐待し、双方が性的な快楽を得るという行為である。男性性器を女性性器に挿入して射精することを目的とするセックスは行わないとされる。このようなサービスを提供する風俗産業に、SMクラブがある。

形成が困難であるというコミュニケーション弱者が考えられる。ヒロコが挙げているのが身体的弱者であり、コミュニケーション弱者とは外見的には問題がないが、会話が苦手な男性である。サクライが挙げている「暗いタイプ」はこれに該当すると考えられる。

3. 援助交際への演技論的アプローチ

ここで用いる演技論的アプローチとは、アメリカの社会学者 E. ゴッフマンに拠っている。彼らは人々がある社会的領域で適切な振る舞いを行う際に選び取る戦略をドラマトゥルギー (dramaturgy) と命名した。ドラマトゥルギーとは、行為者であるパフォーマー、パフォーマーに反応する観客であるオーディエンス、コミュニケーションの場であるステージという三つの要素で成り立っている [Goffman 1963=1986]。

援助交際というステージにおいて、援助交際を行う男女はそれぞれの動機や目的によって、自らの演じる役割を選択しパフォーマンスを遂行する。援助交際女性のパフォーマンスは前回の論文 [圓田 1999] で分析したように、四つ類型によってそれぞれ異なるものとなる。内面希求型「AC系」においては自らの内面を支えてくれる父親や兄といった男性を必要とする娘や妹といった役割を、内面希求型「魅力確認系」においては自己の性的価値を認め高めてくれる男性に対する恋人の役割を演じる。この二つの類型では自己の内面を支えてくれる役割を担った異性を必要とし、対他的な志向をもつ。しかし、残る二つの類型では対自的で、関心は自己に向けられている。欲望肯定型「快樂系」においては、日常の自己とは異なる性的な快樂を楽しむ享樂的な女性を演じ、効率追求型「バイト系」ではお金以外に目的のない、無関心な役割を演じる。

さて援助交際男性を、援助交際を演技論的に分析してみると、援助交際というステージに対して

彼らが抱く幻想から、演技は三つのタイプに分けることができる。一つ目は援助交際が男性側の性的な幻想を充足させる行為であることから、性欲充足型が考えられる。次の二つのタイプは、お金で若い女性の肉体を買って性欲を満たす中年男性と、お金欲しさに身体を売る若い女性という、一般に流布している援助交際を行う男女のイメージとは異なっている。二つ目は援助交際が先の発言に見てきたように、性的弱者である「もてない」男性によってなされた場合、その援助交際は双方の愛情を前提とした恋愛関係を理想として振る舞うタイプが考えられる。これを疑似恋愛型と名付ける。三つ目は前の二つとは異なって、援助交際女性に「父と娘」「兄と妹」といった家族的な関係を求めるタイプである。これを疑似家族型と名付ける。以下、三つのタイプについて論じてみよう。

3-1 援助交際男性における動機の語彙

一番目の性欲充足型について、最初に言及すべきことは、ここで言う「性欲」が「生理的欲求」や「本能」という言葉で置き換えられないことである。援助交際女性に買う男性が何を求めているのかと尋ねると、「身体」や「セックス」、「ただやりたいだけ」という答えが返ってくる。この回答は女性たちから見た、男性たちが援助交際に求める直接的な動機を表現している。この言葉だけをとりえると、援助交際男性は援助交際に性的な行為のみを求めていると考えられるが、援助交際男性は自らの「生理的欲求」や「本能」の赴くままに援助交際に参与するのではない。むしろ男性たちは社会的に構成された「性欲」によって、援助交際に参与するのである。

「性欲は本能の一つとされている。しかし、性欲が喚起されるきっかけには心理的、社会的な要因が関係していると考えた方が妥当である」 [鈴木 1998 p.16] という元セックス・ワーカー⁷⁾である女性が語るように、男性たちは「性欲」で

7) セックス・ワーカーとはソーブランドやファッションヘルス、SMクラブなどの風俗産業に従事する女性たちの呼称である。近年、風俗産業に従事する女性たちの人権や労働者としての権利を認めるために、議論が盛んになってきている。セックス・ワークはそもそも労働かという問題があるために、概念定義が難しい。セックス・ワークを巡る議論については田崎 [1997 pp.30-32] が参考となる。

さえ、社会的な要因⁸⁾によって喚起されている。そしてこの「性欲」を構築しているイメージを性的幻想と呼ぶ。ここでは、「性欲」が「生理的欲求」や「本能」という身体的基盤の上に社会的に構成されたものとしてとらえている。恋人とのセックスを行っているにもかかわらず、風俗産業に通う男性は、彼の恋人とのセックスでは満たすことのできない性的幻想の存在を語っている[『女たちの21世紀』編集委員会 1998 p.8]。この男性は生理的な欲求や本能を満たすために、風俗店に通っていたのではない。彼は社会的に構成された性的幻想を満たすために、風俗店に通っていたのである。ここからも、援助交際を行う男性が単なる「生理的欲求」や「本能」としての性欲を満たしているのではないことが理解できる。そしてここでの「生理的欲求」や「本能」という言葉は動機の語彙としての働きをもつ。

前々回の論文で女性が援助交際に参与する理由として挙げられる「お金」という言葉が他者を納得させ、それ以上行為の動機について追求させないようにする「動機の語彙」であると論じたように、援助交際に参与する男性には、動機の語彙として、生理的欲求や本能としての「性欲」という言葉が存在していると考えられる。ここで言う性欲充足型は、自然や本能という人間の意志が介在しない要因に拠るのではなく、社会的に構成された「性欲」を満たすことと理解できる。疑似恋愛型や疑似家族型の援助交際で現れる自己は言うに及ばず、性欲充足型においても、「自己は呈示される場面から[さまざまな印象を]寄せ集めて生ずる一つの劇的効果」[Goffman 1963=1986 p.298]であるという記述に見られるように、自己とは社会的な場面において意識される、されな

いに関わらず、演技論的な側面をもつのである。ここでは、社会的な場面が援助交際というステージであり、性的幻想というシナリオに従って、自己は性欲を喚起し、これを満たそうとするのである。

3-2 疑似恋愛型

二番目の疑似恋愛型において、男性たちは恋愛に対する幻想を抱いている。このタイプの援助交際男性は、女性よりも援助交際の相手に恋愛的部分を求め、相手に恋人のように振る舞うことを望むことが多いと考えられる。その理由は二つ考えられる。一つには「もてない」ために自分の理想とする女性との恋愛関係を形成する機会がないことと、もう一つには援助交際というコミュニケーションのもつ特徴に起因することの二点が考えられる。

つまり援助交際において、男性は金品を代償に援助交際の相手を見つけることになるが、その援助交際そのものはかなりの自由度を保っており、さまざまなバリエーションがあり得るからである。この自由度とは、援助交際において、男性側だけでなく、女性側からの男性への選択性が高く、いわば自分の気に入った相手を選ぶことができ、また相手にもその拒否の権利が認められていること、そして援助交際の行為内容が必ずしもセックス⁹⁾を伴わなければならないものではないということを目指す。このような援助交際における、時間と場所と行為内容を限定せずに気に入った相手と一緒に過ごせるという、コミュニケーションにおける選択性の高さが援助交際に関わる男女にとって、演技論的なコミュニケーションを産出する契機となっている¹⁰⁾。

8) ここでの「心理的」とは「社会的」という言葉の言い換えに過ぎない。人間は社会的な存在であり、さまざまな社会関係の中で人間の心は形成されている。それゆえ、心理的な要因で何らかの行為が行われたとしても、その心理的な要因は本人の社会的諸関係において生じた行為の結果として存在しているからである。

9) ここでは性的行為とセックスを明確に区分して用いる。セックスとは男性性器を女性性器に挿入して射精することを目的とする行為である。一方性的行為はもちろんここで言うセックスも含んでいるが、それ以外の男女間における性を媒介とした一切の行為を含んでいる。具体例として挙げれば、SMなどのアブノーマルな性交渉から、手や口によって男性性器を射精させる行為、裸を見せたり触らせたりする行為、はては一緒に食事したり話をする行為まで含んでいる。男女が一緒に食事したり話をする行為がなぜ性的な行為の範疇に入るかと言えば、男性たちが一緒に話をしたり食事をしたいと望む女性たちの年齢が十代や二十代に集中しており、男性たちは間接的に若い女性の性を買っていると考えられるからである。

10) 援助交際における疑似恋愛関係は援助交際関係の文献にしばしば登場する。例えば、「自宅買春で恋愛気分を楽しむ男」[大治 1998 p.122]と題された文章では、36歳の独身サラリーマンは買春において性欲処理だけでなく、孤独を癒す恋愛的要素をもっていたことが報告されている。

次に疑似恋愛型の援助交際の事例を見てみよう。

<データ3>

筆者：援助交際というのはH（セックス）までを含むものとして考えている？

サクライ：うん。中には違う人もいますよ。男の人で、援助交際という形でこっちが三万って言ったら、三万もらえるんですけど。別にあの、Hがすべてじゃない。だから、三万あげるから、そのかわり一日恋人気分と一緒にいたいって言う人もいますよ。だから一緒に遊園地に行った人もいますよ。でも、年近かったんですよ。私が当時17で、相手が19。（電話での交渉では）その人がいくら希望って聞いてきたから、年（年齢）聞かなかったんですよ。そしたら「2から3（万）希望なんだけど」って言ったら、「じゃ3万出すから、一日恋人になって」と言われて、で、その日の朝に豊島園の駅で待ち合わせをして。

（23歳 OL 1998. 3. 20 東京小岩）

サクライの事例のように、援助交際において男性側が直接的に「恋人になって」と言うのは珍しいケースである。この事例では、男性と女性とがほぼ同年齢であるために、男性から「恋人になって」という言葉が出てきたと考えられる。そしてサクライは、恋人になるという一時的な役割演技（role-playing）を了承して、デートが成立することになった。恋愛幻想型の男性は援助交際女性の恋人として振る舞い、彼女に彼の恋人的に振る舞うことを要請する。

また、しばしば筆者が取材の中で女性たちから聞くところでは、男性は援助交際で出会った女性が気に入ると、真面目に「好きになってしまいそうだ」とか「彼氏がいないのならつき合ってほしい」と告白する（コクル）ケースをしばしば耳にする¹¹⁾。援助交際女性に告白する男性は、筆者の

耳にした限り二十代・三十代の独身男性が多い。なぜ二十代・三十代の独身男性が告白するのかを考えてみると、その理由は彼らにとって、援助交際女性が風俗産業と異なる素人の女性であるために、援助交際を行う彼女自身の自由意志によって参与していることが一点目、二点目は性的な行為を行うことが個人の内面に、「こんな行為をするから、あるいはしたために肉体だけではなく心にもつながりができた」という感覚をもたらし、容易に転移感情を生み出すからである。援助交際男性が女性に告白する理由としてこの二点が考えられる。

加えて、この男性たちは、日常生活において仕事や居住区の関係で普段女性と接したり話す機会が物理的にないという理由や、女性と話すことが苦手であったりもしくは性格的に女性に好まれないというコミュニケーション弱者や、身体的に女性から好まれないという身体的弱者であることによって、女性と恋愛関係を形成して性的な行為に至ることが困難であるからである。先のヒロコの「もてん人」が援助交際男性には多いという発言も、このことを考えれば理解できることである。

女性の方はこのような男性に対して、お金がもらえるという理由で、恋人の振りをするという役割演技に徹するケースが多いようである。しかし男性の度が過ぎれば、「冗談じゃない」と言って、彼女の印象操作（impression management）は終わりとなる。

次に疑似家族型の援助交際についてみてみよう。

3-3 疑似家族型

援助交際に関わる男性は、性的幻想から生じた性欲を満たすことを目的とするのが一般的である。しかし援助交際の特殊性は、援助交際男性が単なる性欲の充足を目的とするだけでなく、彼らの抱える問題をコミュニケーションの形で顕現する。

援助交際という名目だけなら100人、彼女が「ブ

11) 「別に君が嫌がるなら何もしない。僕と話して好きだなんていう気持ちを持ってくれたら、ホテルに来てくれればいいんだから。五万円までなら出すよ」[速水 1998 p.104] という53歳の援助交際男性の事例が報告されている。この著者は、この男性は女子高校生に対してあり得ないはずの「好き」という幻想まで買おうとしていると、指摘している。

レイ」と呼ぶセックスを行う援助交際なら30人という援助交際男性に会ってきたミユキは、援助交際男性がセックス以外の行為を求めてくる現象を次のように語る。

<データ4>

筆者：プレイ以外のやつはどんなのが多い？

ミユキ：だいたいなんて言うんでしょうね。演じてくれるっていうのが（多い）。妹になってくれとか、娘になってくれとか。

（18歳 高校生 1998. 9. 28 神戸三宮）

三番目の疑似家族型は、家族関係の模倣である。これには論理上いくつかのバリエーションがあり得るが、筆者が直接耳にしたのは「父と娘」という組み合わせの疑似親子型、「兄と妹」という組み合わせの疑似兄弟型である。援助交際においては、ミユキのインタビューに見ることができると、援助交際女性に「娘」や「妹」といった家族的な関係を求めてくる男性が存在している。ここではいくつかの詳細なインタビューが得られた疑似親子型について論じたい。

疑似親子型では、援助交際男性が三十代、四十代で、援助交際女性が十代もしくは二十代前半の女性という組み合わせの時に生じる。この場合、援助交際男性は家庭をもち援助交際女性と同年齢の娘がいたり、あるいは本来十代の娘が存在しているもおかしくないという社会的な位置にいながらも娘がいないという場合である。疑似親子型は援助交際における、一世代も違う年齢差がもたらす世代間のギャップに起因している。

次に取り上げる「父と娘」という役割演技は、疑似家族的な役割演技を求める援助交際においては、もっとも典型で、またよく耳にするケースである。まずは事例を見てみよう。

<データ5>

筆者：援助交際相手の男の人は、自分にどういう態度で接してきたの？

マイ：やさしかったよ、みんな。

筆者：みんなマイと同じ年齢の歳の子供がいるような人たち？

マイ：そうそう。下手したら、自分の娘と同じく

らいとか、まあ前後しているけど、同年代ぐらいの子供いてはるとか、あとずーと、けっこう最後まで、高校なっても同じぐらいの金額をくれてはったんおっただけど、その人は、どんなにがんばっても男の子しかおらんかって、子供四人とも男の子で、（それ）で、女の子がどうしても欲しい、その幻想っていうか、思いを私に当てはめてみたい。いろいろな所に連れていってもらった。遊園地に連れていってもらったり、映画館に連れていってもらったり。私ら（の年代にとっては）一人では行かへんような所に連れて行ってもらった。（25歳 専業主婦 1998. 10. 1 神戸三宮）

前回の論文で「快樂系」として紹介したマイは、十数年前の中学生時代から始まった、ある男性との援助交際を振り返って、このような出来事があったことを話してくれた。この事例では、マイは子供四人すべてが男の子であるという男性と援助交際を行っていた。マイの言葉によると、相手の男性は「女の子がどうしても欲しい」という幻想を彼女に当てはめていたと述べている。この男性は、自分には娘がいない（四人の子供はすべて男の子）という事情のために、マイを自分の娘のように扱うことで、その幻想を満たしている。そして彼は、仮に自分に娘が存在したとするならば、選択していただろうという行為を、例えば遊園地に連れていくことや映画館に出かけることを、援助交際という金品が介在したコミュニケーションの中で行っている。

また別の事例を見てみよう。短大生の二人組のユミとミカは単独で援助交際も行うが、援助交際の抱えるリスクを軽減するために二人一緒に、しばしば援助交際を行ってきた。彼女たちが行ってきた援助交際の中で、60歳ぐらいの男性との援助交際が一番印象に残っていると話している。この男性は、「会長」という肩書きを名乗り、大学でレクチャーをしたこともあると語るように、社会的地位と知識をもった人物であると考えられる。援助交際において通常ラブホテルが使用されるのだが、一流ホテルの一室で会って話すだけで2万円ずつ二人に払ってくれるという援助交際は、彼

女たちが行ってきた援助交際の中でも「おいしかった」と語るほど楽なものであった。筆者はこの話をするだけという目的について、彼が彼女たちと話をすること自体が目的なのか、あるいは話をすることは前段階であり、一般の男性と同じように最終的にはセックスをすることが目的なのかについて尋ねている。なおこの男性は頭髪が真っ白なので「シラガ」と呼ばれている。

<データ6>

筆者：それは、セックスをやらしてくれないから、とりあえずお金を払うって話なの？

ユミ：はじめ白髪はそんなことはない。「シラガ」って呼んでいるけど、そいつはやりたいていという感じじゃなかったよな？

ミカ：ほんまに娘やってん、私ら。

ユミ：最初は。ほんま、かわいがっているっていう感じで、好きなもん食べなっていう感じで。でも欲（が）出てきたんやろうな。

(ユミ18歳 ミカ19歳 短大生 1998.11.3 大阪難波)

この「シラガ」と呼ばれていた男性は、本当の「娘」のように彼女たちを扱い、彼女たちも本当の「娘」のように振る舞っていたという。結局この援助交際は、彼が彼女らに話をすること以上の性的な関係を求めるという、「欲（が）出てきた」ため、三、四回行われた後、この時点で終わりになった。この事例のように、血のつながった親子が通常性的な関係を形成しないこととは対照的に、援助交際における「父と娘」という疑似親子型の役割関係は、年齢差のある「男と女」の関係でしかないために、性的な関係を目的としてみやまると考えられる。しかし、次に見るエリの事例は性的な関係を目的としない純粋な「父と娘」という関係である。

エリは取材当時、大阪府下の短大に通う二回生である。彼女は高校時代まで、横浜市に住んでおり、中学・高校の間で援助交際を行っていた。短大生になった今も、高校時代に知り合った援助交際男性と帰省時には援助交際という形で会っていると言う。エリの場合、筆者がこれまでに取材し

た援助交際とは異なってかなり特殊である。彼女の行う援助交際は二十人以上行ってきて中で、一度だけ手を用いて男性を射精させた以外、すべて話をしたり食事をしたりするという身体的な接触の伴わない、コミュニケーションだけの援助交際である。例えば、彼女が高校三年生の時に援助交際をした46歳の男性は、性的な行為が一切なしに、会うだけでお金を払ってくれるという。これまでの取材から筆者は、援助交際における疑似親子関係が男性の性欲を充足することを目的とした際に、その前段階的なコミュニケーションとして存在していると考えていた。エリはこの46歳の男性が性的な行為を求めていないように語るのも、このことに疑問をもった筆者は次のように尋ねた。

<データ7>

筆者：それは下心があつての話？

エリ：なくて、ただその年になると、娘が相手にしてくれなくなる年（年齢）じゃん。だから、その相手をしてくれる人が欲しいんじゃないの？

(20歳 短大生 1998.3.8 大阪鶴橋)

エリの話によれば、この男性は自分の「娘が相手にしてくれなくなる」から、話し相手としてエリと援助交際をしている。では当時、この46歳の建設会社社長と、18歳の高校三年生のエリはどんな話をしているのであろうか。エリの方からは積極的に話すことはなく、相手はエリの住所はおろか本名も知らないという関係では、彼女は男性の話の聞き手となって、相談を受ける立場にある。

<データ8>

筆者：じゃあ、今までどんなことを相談されたの？

エリ：娘のことが多いかな。やっぱり同じ子供の立場として。

筆者：どう思うとか？

エリ：「最近、娘が家に帰るのが遅い。彼氏がいるのかって聞いても、そんなの関係ない」と言って、「いるかどうか分からない」って言っているのね。そういうのとかで。

この会話からは、男性はまずエリと同年代の娘をもっているが、その娘とコミュニケーションを取ろうと思っても「そんな関係ない」と言われてしまう立場にあることが分かる。そして、彼の娘とコミュニケーションを取りたいという願望は、エリが彼の娘の相談役と娘そのものの役割を兼ねることによって充足させられる。その役割演技を十分に果たしているからこそ、次のような発言が登場する。

<データ9>

筆者：援助交際であったオヤジにほめられることってある？

エリ：「うちの娘もこんなに素直だったらなあ」っていうの、よく言われるセリフ。もうオジさんの娘にならないか、みたいな。

この男性には、エリは自分の本物の娘以上に娘らしく映っている。ではこの男性にとって、娘とはどのような存在であると考えられているのであろうか。類推するに、この男性にとって、娘とは血縁関係が存在し、しかも「素直に」話をしたり聞いたりしてくれる十分なコミュニケーションが可能な相手なのである。援助交際というステージにおいて、血縁関係はないが、エリは娘役を演じるパフォーマーであり、オーディエンスである男性にとっては彼の娘以上に娘らしい存在なのである。このよう関係が可能なのも、血縁関係に基づいた父と娘という関係が自然発生的に生じてくるのではなく、「父と娘」らしい関係を築こうとする意識的な相互行為の結果として「父と娘」らしい関係が築かれるからである。つまり血縁関係が存在する実の父と娘という関係もまた役割演技なのである。この男性は血のつながった実の娘との「父と娘」という関係が成り立っていないために、エリとの「父と娘」というコミュニケーションを援助交際に求めているのである。この二人の間の「父と娘」らしさは、家族とは1970年代に登場した「アメリカン・ホームドラマやニューファミリーの、明るく幸福そうな家族のイメージ」[三浦 1996 p.46]によって培われた家族幻想に由来していると考えられる。

しかしながら、援助交際男性から「オジさんの娘にならないか」と誘われるまでに、「素直」でいい子となっているエリの振る舞いは、彼女の本心から出たものではない。

<データ10>

筆者：自分はちゃんと話を聞いてあげて、素直ないい子になったりする？

エリ：そうやね。お金（を）もらえるからね。

「お金（を）もらえるから」という発言に見られるように、ここでの「父と娘」は援助交際というステージにおいて成り立っているもので、そこで行われるコミュニケーションは金品の介在なしには成り立たないものである。しかしエリによれば、この「オジさん」はエリの「娘」としての振る舞いが金品を媒介にして成り立っているものとは考えていない。つまり、この46歳の男性はエリの「娘」としての振る舞いを演技としてとらえておらず、ましてやエリから「娘」という演技を買っているとも考えていない。エリの方ではこの「父と娘」という関係がお金を媒介にして成り立っていることは認識しており、また「娘」という演技を行っているという意識は明確にもっている。このギャップはどこから生じるのであろうか。

それは、この男性がエリに対して性的な行為を求めなかったことにあると考えられる。ではこの男性がエリのような女子高校生に対する「性欲」をもっていないかという、そうではない。この男性はエリのような女子高校生とのセックスを望むときには、エリの、援助交際を行っている友達を紹介するように頼んでいるからである。ここから、この男性はエリを性的な行為を行う対象として見なさなかったために、この男性にとってエリと援助交際というステージで会うことは何らやましいものではなく、その結果エリの演技を演技とは思わなかったのではと考えられる。それゆえに、エリもまた、お金をもらっているからと言いつつも、「本当のお父さんみたい」や「第二のお父さん」と思った時があると、インタビューでも語ってくれたのである。

では、エリはなぜこの男性に性的な行為を求められなかったのであろうか。最後にエリがこの男

性に性的な諸行為を求められなかった理由を考えてみよう。

5. 演技としてのコミュニケーション

ここで少し注意を喚起しておきたいのは、エリのような援助交際のケースは現実的に成立することが難しいということである。ほとんどの援助交際男性は、金品を女性に支払うことで、援助交際のもつコミュニケーション的な側面を「疑似恋愛」的に、あるいは「疑似家族」的に振る舞うことで消費し、性的な諸行為に至っている。またほとんどの援助交際女性は、その目的が金品であるなしにかかわらず、金品を受け取ることで男性性器を女性性器に挿入し射精するというセックスを主要なものとする、性的なサービスを、男性に提供している。エリのように、会話だけを目的とする援助交際を続けることは難しい。先のユミとミカのケースに見られるように、男性側は最終的にセックスを求めることになるからである。この点について、エリに尋ねてみた。

<データ11>

筆者：援助交際している女の子はだいたいセックスまでやっているけど？

エリ：バカじゃん。(セックスを) やって、お金もらって、そんなもらえて当たり前。やらなくてもらうっていうのが一番賢いやり方なんだよ。

しかし現実にはお金を「やらなくてもらう」のはかなり難しい。彼女によると、テレクラにおいて電話で話をしている段階で、ただ話をするだけで大金を払ってもいいという男性を見分けるコツがあるのだと言う。話し方や雰囲気の特徴があると話すのだが、聞き手である筆者にはよく理解できなかった。エリの援助交際を特徴づけているのは、四十代の男性との会話を三時間も続け、相談役に徹することのできる、彼女自身のコミュニケーション能力なのである。ゴッフマンは、「ある地位をもつ人びとの集合が他のさまざまな地位をもつ人びとのさまざまな集合のオーディエンスの眼に維持できるイメージは、パフォーマーがオー

ディエンスとのコミュニケーション上の接触をどこまで制限できるか、その能力次第である」[Goffman 1963=1986 p.284] と、パフォーマンスが成功するか否かは、パフォーマーとオーディエンスのコミュニケーション能力次第であると論じている。エリの「娘」の演技はパフォーマーとオーディエンスの双方として完璧であったが、この46歳の男性もまた、エリに対しては性的な幻想を抱かず「父」であり続けたことから、完璧なパフォーマーとオーディエンスであったと考えられる。この演技論的なコミュニケーションは誰に何をもたらしているのだろうか。

次の会話を見てみよう。エリが友達と二人で行った沖縄旅行で一ヶ月滞在したりゾートホテルの経費二人分を、この男性が全額支払ってくれた時の話に関連させて、このことを尋ねてみた。

<データ12>

筆者：そういう（男性は行かないが旅費二人分を払う）ことをすると、オヤジはうれしい？

エリ：なんかお金を出すことに、惜しみないっていう感じ。ただ喜んでくれると、自分の娘が喜んでいよううれしいみたいなの。

筆者：オヤジを楽しませているんだ、一応は？

エリ：だって相談とかするから、とりあえず答えてあげるでしょう。だから、こう言った場合、こう答えたら、このオヤジはこういう答えを求めてコイツはこう言っているのかなと、想像して受け答える。カウンセリングみたいなのやつだね。

このインタビューからは、娘役に徹するエリが相手を飽きさせないように、コミュニケーションによって楽しませることに心がけていること、「娘」としての発言が男性に対するカウンセリングとなっているという、この二点が理解できる。エリがこの男性にセックスを行うことを求められなかったのは、彼女が彼の娘役を彼の血のつながった実の娘以上に演技することで、娘との親密なコミュニケーションを求めていた彼の心を癒したからである。

では、なぜ金品を媒介にした性的な行為を行う援助交際に、このような演技論的なコミュニケー

ションが登場するのか。その答えは、援助交際というステージのもつ性質に拠っている。この性質は援助交際男性と、マニュアル的でお店や従業員といった第三者が介入している風俗産業に通う男性とを比べると明瞭になる。前々回の論文〔圓田 1998〕でも強調したように、援助交際は風俗産業と比べて、相手を選ぶ際の選択性が高く、援助交際そのものの内容や交渉過程にも高い自由度が保たれている。この援助交際のもつ自由度の高さについては、援助交際において「出会い」という言葉が用いられていることからもうかがい知れる。このような援助交際のもつコミュニケーションにおける選択性の高さが、援助交際に関わる男女が日常の社会生活では実現できないさまざまな願望の充足と、その結果として伴うカウンセリング的な効果を、一時的にせよ、もたらしている。

結局のところ、男性たちに対してカウンセリング的な効果をもつ援助交際は何によって成り立っているのか。答えは、男性たちの援助交際というステージにおいてしか満たされることのない幻想と、当事者である男女のコミュニケーション能力によって、成立しているのである。先に見たエリのように、相手の意図や願望を予期し、相手の望む回答を用意できるという優れたコミュニケーション能力をもつ者は数少ない。彼女以外の援助交際に参与する男女はコミュニケーション能力に長じていなくても、自らのもつ幻想を援助交際というステージによって充足し、その内面を癒すことができる。

援助交際というステージにおいて男女は、オーディエンスである相手の願望のあるなしに関わらず、自らがパフォーマーとして何らかの役割を演技し、またオーディエンスとなってコミュニケーションを行う。その役割演技とは、父親であったり、娘であったり、やさしい恋人であったり、性的幻想を満たそうとする個人であったりする。そしてこの援助交際におけるドラマトゥルギーを可能としているのは、援助交際というステージのもつ、「脱社会性」という特性に拠っているのである。この脱社会性によって特徴づけられる脱社会的な時空間は匿名性と身体性という二つの性質によって成り立っている。匿名性は個人に、個人の過去や社会的地位がもつ社会的負荷からの自由を

与え、身体性は思考よりも身体を主動作させることによって感覚的で直接的な関係を享受することをもたらし。この二つの性質を包含している援助交際というステージは日常生活において実現しない類のコミュニケーションを可能にするのである。

引用・参考文献

- Goffman, E. 1959 *The presentation of self in everyday life* Doubleday & company : 1974 『行為と演技』 石黒毅訳 誠信書房
- 速水由紀子 1998 『あなたはもう幻想の女しか抱けない』 筑摩書房
- 圓田浩二 1998 「援助交際」というコミュニケーション 『関西学院大学社会学部紀要第81号』 pp. 117-128
- 圓田浩二 1999 「援助交際女性の類型論」 『関西学院大学社会学部紀要第82号』 pp.183-195
- 三浦展 1996 「欲望する家族・欲望された家族」 上野千鶴子編 『色と欲』 所収 pp.27-46
- 村尾建吉 1999 『援助交際「社会」のゆくえ』 鹿砦社
- 大治朋子 1998 『少女売春供述調書』 リヨン社
- 『女たちの21世紀』 編集委員会 1998 『女たちの21世紀16号』 アジア女性資料センター
- 鈴木水南子 1998 「男性はなぜ買春するのか」 女子教育もんだい編集委員会編 『女子教育もんだい74号』 女子教育センター発行 pp.14-20
- 田崎英明編著 1997 『売る身体・買う身体』 青弓社

付記：ご意見・ご感想・情報提供などございましたら、次の電子メールアドレスまでお願いします。

Ghost@ma 5.seikyounet.jp

Dramaturgy about “papa and daughter” on compensated companionship

ABSTRACT

The purpose of this paper is to analyze men within their compensated relationships (*enzyo-kousai*). These relationships seem to satisfy their sexual desires. But, they take part in it in order to satisfy their fantasies which are a sexual fantasy or a fantasy of romantic love or a fantasy of family. Here, their conducts are grouped into three types by their fantasies.

Their fantasies in compensated companionship are (1) “sexual pleasure type” with sexual fantasy, (2) “quasi-lovers type” with fantasy of romantic love, and (3) “quasi-family type” with fantasy of family by dramaturgical approach. Furthermore, the “quasi-family type” has two sub-categories that consist of “quasi-brother and sister type” and “quasi-papa and daughter type.” That is, compensated companionship is dramaturgy made from three fantasies.

This paper picks up and analyzes “the quasi-papa and daughter type” in detail. As a consequence of this analysis, this paper concludes that men within compensated relationships have fantasies of family far apart from their own family in everyday life. Thus, they experience a counseling-like relationship with women and their souls are healed by communication with these young women.

Key word: dramaturgy, fantasy, counseling